

堂内の荘厳具としての幡の一考察 (その二)

青海邦子

要旨

仏教において、今も昔も仏像や経論が尊崇されこれらが重視されるのは当然と理解されるが、仏教伝来当初に仏像や経論の外に「仏具」として「幡」と「蓋」(天蓋)がともにもたらされたことはよく知られている。仏教での「幡と蓋」がいかなる役目を果たし、どういう意義をもっていたものであるかについて、日本の幡の歴史を考察しながら、今回、神下山・高貴寺(葛城山西麓大阪府河南町平石)における、経年の間、仏殿の周りに懸けられていた幡や幡の断片について調査、研究を行ったので報告する。

キーワード：幡、荘厳具、高貴寺

1. はじめに

仏教において、今も昔も仏像や経論が尊崇されこれらが重視されるのは当然と理解されるが、仏教伝来当初に仏像や経論の外に「仏具」として「幡」と「蓋」(天蓋)がともにもたらされたことはよく知られている。仏教での「幡と蓋」がいかなる役目を果たし、どういう意義をもっていたものであるかについては第一報で調査した堂内の荘厳具としての幡の一考察(日本の幡の変遷、中国における幡の変遷、幡の形状と仕立て・使用裂など)を抜粋する。

幡は仏殿の内外を飾る仏事の荘厳具として、また延命長命を願う続命幡しよくめいばんや死者の冥福を祈る追善供養の命過幡めいかばん せんもうぼた(薦亡幡)として作られた。

今回、神下山・高貴寺(葛城山西麓大阪府河南町平石)のご協力により、経年の間、仏殿の周りに懸けられていた幡や幡の断片について、裂の欠損や刺繍糸のほつれや汚れの付着など、また墨書銘のあるものなど、それらについて調査研究を行ったので報告する。

2. 調査結果と考察

2-1 日本の幡の変遷

幡は日本に仏教伝来とともにもたらされたと考えられている。日本最古の勅撰書である『日本書紀』によると、幡に関する初見は欽明天皇13年(552)の条に「冬10月。百濟聖明王、^{聖名}遣_二西部姫氏達率怒唎斯致契等_一。献_二釋迦佛金銅像一軀。幡蓋若干^{注1)}經論若干卷_一。」とあり、百濟の聖明王より金銅釈迦像や經論とともに幡蓋がもたらされたことが知らされている。幡蓋については、初期仏教經典では、仏に対する供養具として「華・香・伎楽・繪蓋・幢幡」(『大典量寿經』下)、莊嚴具として「繪綵宝幢・幡・蓋・名華」(『過去現在因果經』一)の記述がみられる。幡蓋は幡(梵語の pataka)と蓋(chā-tra)の二具を指すが、密教では四角形の天蓋の四隅に幡を垂らす三昧耶天蓋がありこれは幡(はた)と蓋(かさ)を組み合わせた幡蓋と言う莊嚴具である。

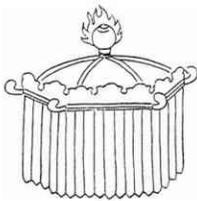


図1 天蓋

わが国の古典では「幡蓋」を熟語で使用することが多いが、天蓋(図1)と同意語で使用することがある。

また、同書推古天皇31年(623年)の条には「31年秋7月。新羅遣_二大使奈末智洗爾_一。任那遣_二達率奈末智_一。並來朝。仍貢_二佛像一具。及金塔并舍利。且大灌幡一具。小幡十二條_一。即佛像居_二於葛野秦寺_一。以_二餘舍利。金塔。灌頂幡等_一皆納_二于四天王寺_一。」^{注2)}とあり、大灌頂幡一具と小幡12条が新羅・任那よりもたらされ、四天王寺に納められたことがわかる。

さらに、持統天皇3年(689)の条には「正月壬戌。詔_二出雲國司_一。上_二送遣_一。值風邪浪_一、人上。是日。賜_二越蝦夷沙門道信佛像一軀。灌頂幡。鍾鉢各一口_一。」^{注3)}とあり、幡は百濟・新羅・任那の朝鮮半島より仏像やお経(經論)などと共に伝来したことがうかがえられる。また、文物は、他の多くの宝物類と同様に中国から朝鮮半島を経由して我国へもたらされたものと推測される。

しかし、当初の幡は遺存していないので実態はつかめない。現在最古とされている法隆寺伝

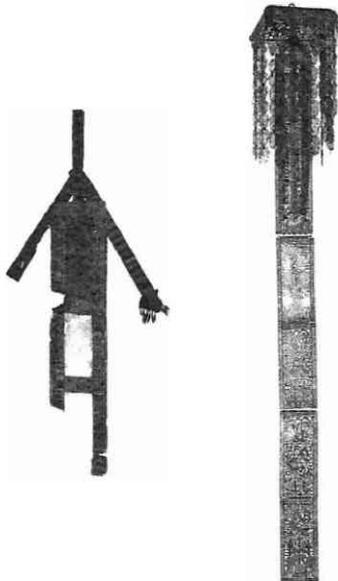


図2 蜀江錦綾幡
(法隆寺)

図3 金銅灌頂幡
法隆寺献納宝物

世品の幡について調べると、蜀江錦を用いた縁が一条の江錦綾幡（図2）、蜀江錦で仕立てた聖徳太子ゆかりの間道小幡（国指定重要文化財）、全長五メートルにおよぶ献納宝物の金銅灌頂幡（国宝、東京国立博物館）（図3）が名高く、正倉院にも聖武天皇一周忌法要が東大寺で営まれたとき使われた数百旛の錦の幡（図4）・羅の幡（図5）のほか、金銅幡四旛（図6）など多数が残っている。平安後期の遺品では岩手・中尊寺金色院の幡頭二枚と、迦陵頻伽文を表した幡身一坪の金銅幡がよく知られている。玉幡は広島・厳島神社の「平家納経」の安楽行品の見返しに描かれた絵によって平安時代の姿をうかがい知ることができるが、当時の遺例はなく、金銅板製はなく幡足などに玉を用いた室町時代以降のものがほとんどである。



図4 錦幡…聖武天皇一周忌法会の道場荘厳具



図5 羅幡…聖武天皇一周忌法会の道場荘厳具

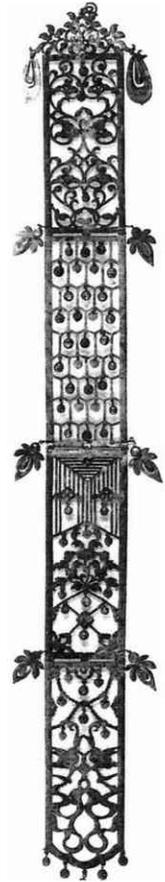


図6 金銅幡

2-2 幡の形状と各部の名称と種類と材質

幡の形制は幡頭・幡身・幡足から成っており、あたかも人形（ひとがた）を擬して作られたかのようにも見える。幡頭は舌をそなえた三角状をした帯紐状の幡頭手を付ける。幡身の各坪は縦長で、坪堺によって各坪ごとに区切られており、坪の周りには縁をめぐらす。

縁の各坪堺より紐状の幡手を付けるものがある。二条縁では縁をめぐって坪堺との交点上に金銅丸金具を飾るものが多い。幡足は長い带状で各々少しずつ重ね合わせて垂下する。なお、幡足はおおむね五条か七条の奇数になるものが大部分である。（図7）また幡身には仏、菩薩、明王、天王などの法尊を描いているものが

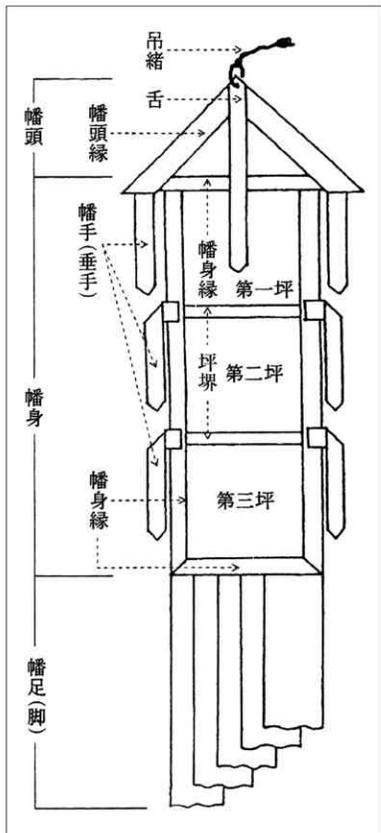


図7 幡の各部名称

あるが、仏像幡、種子幡、三昧耶幡、蓮華幡の区別がある。正倉院の彩絵仏像幡や、西域発見の彩画菩薩幡がそれに当たる。

材質は錦・綾・平縮羅などの裂地製や刺繍のものが大部分であったが、地に金銅板に透彫・線彫を施した金銅幡、各種の玉をつなぎ合わせた玉幡、総飾り^{ふき}を手足にする糸幡、板を芯とする板幡、略式の紙幡などがある。また色相による名称の付いた五色幡・八色幡・九色幡・雑色幡などの種類がある。用いる場所や堂舎によって呼称も変えることがあり、堂幡、庭幡、屋上幡、天蓋幡などの区別がある。用法によってみると、続命幡(寿命)、命^{めい}過幡(薦亡幡)(命終の時に立てる幡のこと)、送葬幡(四本幡)、施餓餓幡などがある。

さらに中国の朝儀に用いた幡も、儀式とともに日本に伝わった。元日朝

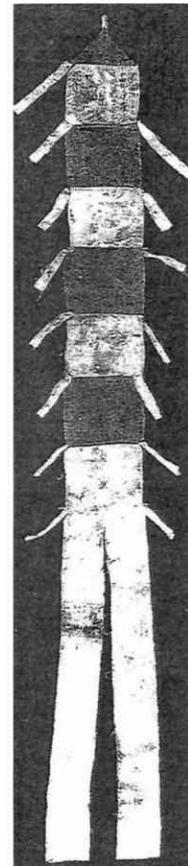


図8 彩色平絹幡・開元13年銘敦煌文物研究所

2-3 中国における幡の変遷

中国に於ける幡の様相を調べてみると、中国における年代の明確な幡の遺品には開元13年(725)の発願文を有した彩色手絹幡(図8)がある。この幡は平絹を方形に裁断したまま裂を縫い合わせたて繋ぎ、簡素な幡である。これより遡る完形遺品はみあたらないようである。しかし、壁画においては、間接的資料であるが、敦煌莫高窟の壁画で調べることが出来る。敦煌莫高窟は紀元4世紀より14・5世紀の長期にわたって造営され、

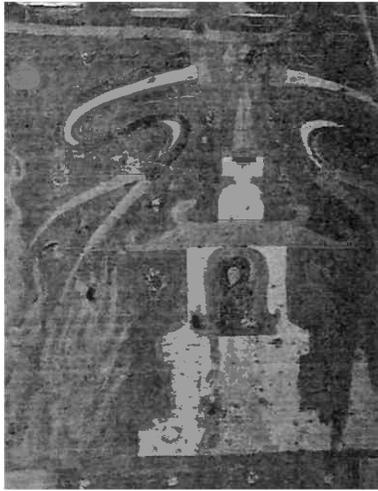


図9 沙弥守戒自殺因縁図
(敦煌莫高窟・第257窟・南壁)

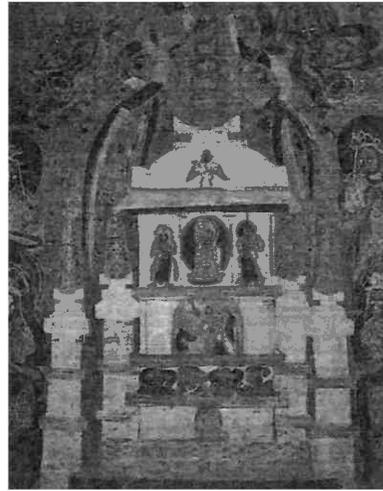


図10 金剛宝座塔
(敦煌莫高窟・第42窟・西壁中央南側)

壁画や塑像を有する石窟は500近くあるとされている。これらの窟の中の幡は5世紀末頃とされる北魏の「仏三尊図」と「沙弥守戒自殺因縁図」(図9)にみられる。どちらも二流の幡が闕屋上の相輪に懸けられている。幡の形は細長い裂を単に合わせただけのように見える。坪は長い一坪のままである。北周(557~581)になると、これらも北魏の幡同様相輪に翻っているが、坪を四坪か五坪に区画するようになる(図10)。各坪はかなり縦長である。このように当初の幡は、闕や塔の相輪に懸けられていたことが知られる。隋代になると、縁に一条にした五坪の幡と、縁を二条に作った四坪の幡がいずれ



図11 仏說法図
(敦煌莫高窟・第305窟・西壁北側)

も天蓋に懸けられているのが敦煌莫高窟の「仏說法図」(図11)にみられる。初唐になると、幡頭は三角状で、下方の左右により紐状の幡頭手を付け、幡身各坪は正方形に近くなり、縁と坪界を一条にした正倉院幡を彷彿させる幡がみられる。盛唐になると、先述のごとく開元年銘の彩色平絹幡の遺存である。この幡は各坪形が初唐のそれより一層縦が短くなり、ほぼ正方形になるところが目される。染は纈纈・藤纈が用いたことがうかがえられる。幡頭・坪の形の変遷を我国の上代の幡に対応させることが出来る。

2-4 幡の形状と仕立て・使用裂の変遷

幡は遺存している最古とされている法隆寺系幡からこれに続く正倉院、そして中世へと時代を経るにしたがって、幡はどのように推移していったのか、その変遷について調べる。

天武・持統朝と比定される蜀江錦綾幡（図12）は幡頭部が帯紐状で、坪は非常に縦長（坪の縦は横の3.1倍前後）である。第一坪目に錦を裕で用い、第二坪目以下は綾の単で一枚通して使っている。縁と坪堺は共に一条で、錦を当てる。幡足は五条を少

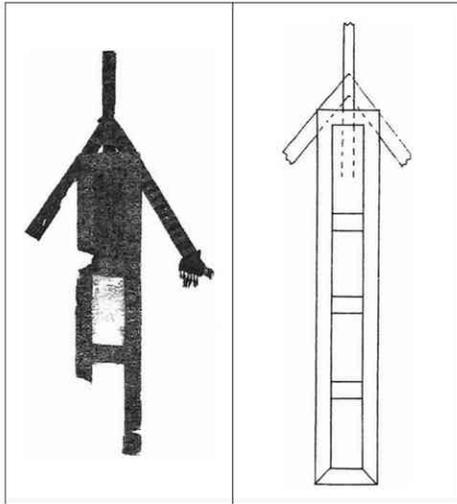


図12 蜀江錦綾幡…天武・持統朝（672～696）

しずつづらせながら重ね合わせて垂下し、様々な色の綾などを用いるが、大部分欠失しており仕立ては判然としない。続いて持統朝とされる平絹幡（戊子年銘）（図13）ではすでに、紐状幡頭とそれらに囲まれた三角状の空間に当たる鏡面に別裂を当てた併用形式が認められる。この幡は命過幡であり、幡頭・幡身・幡足とも茶色味を帯びた黄地平絹で仕立てられる。各坪の長さは蜀江錦綾幡よりやや縮まるもののまだ縦長（坪の縦は横の1.6倍）である。縁と坪堺はともに一条。幡足は五条で、少しずつづらせ

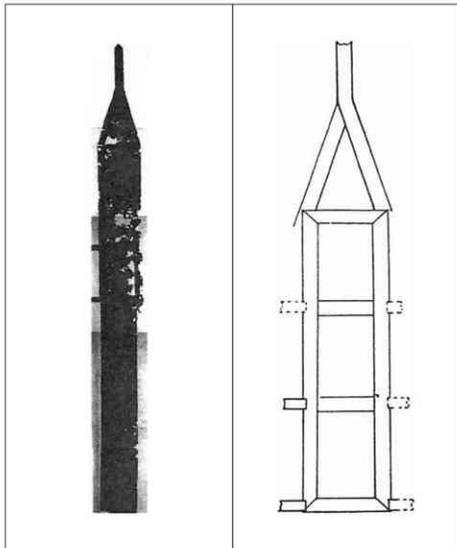


図13 平絹幡（戊子年銘）持統二年（688）

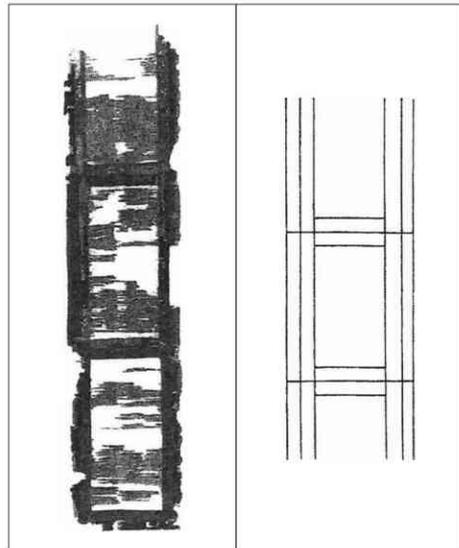


図14 広東綾幡残欠（和銅七年銘714）

て垂らす。各条の仕立ては両側とも三つ折り縫いとするが、裂が片方の場合は縫わずにそのままとしている。引き続いて和銅七年銘の広東綾幡残欠（図14）であるが、この幡は幡頭部を欠失している。前掲の2つの幡にはみられなかった縁と坪堺は二条となり、種々の色と文様の綾が使われている。寺系幡の仕立てで特筆すべき点は、縫い目の細かさにある。仕立て方に付いて、針目は細かく、仕事ぶりには熟達した技がうかがえる。天平勝宝四年（752）の額羅袷幡（図15）〈大仏開眼会用〉に於いては、幡頭部の坪はほぼ正方形に近づいてくる（坪の縦は横の1.09倍）。幡身の坪は平絹を袷とし、その両面に額羅を当てた都合四枚重ねで、いずれも一枚裂を通して用いている。薄物の羅を通して下の平絹の色が浮かび上がって見える。幡足は欠失しており推定出来ない。

続いて天平勝宝九歳（757）の道場幡（図16）〈聖武天王一周忌齋会用〉では随所に顕著な変化が認められる。まず、幡頭部は三角形で、これまでひと続きであった紐状幡頭の懸緒と舌が独立し、前者は縁の山形の頂に、後者は縁の内側より垂らすようになる。幡身部（ここでは法隆寺系幡との比較の上で重要な錦斜継分袷幡について）に於いては、これまで一枚続きであった坪裂が各坪ごと袷に作られるようになる。すなわち、各々の坪は二種類の錦を斜めに継ぎ分け、この継ぎ目と坪堺、さらに縁と坪との境目にも表裏両面とも平絹の細い覆輪で被っている。縁は錦で、30種類ほどみられ

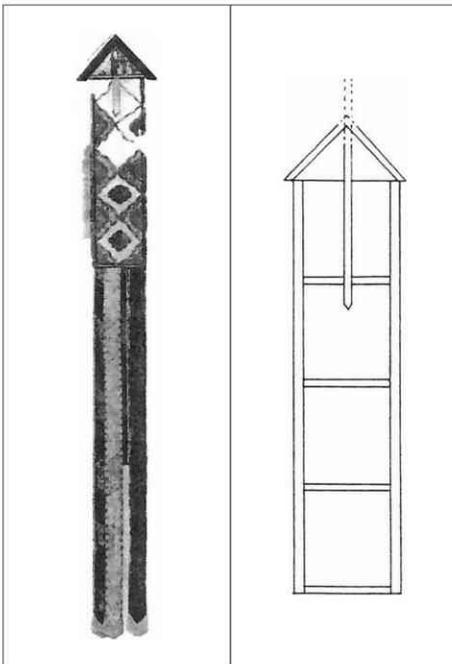


図15 額羅袷幡 天平勝宝4年(752)

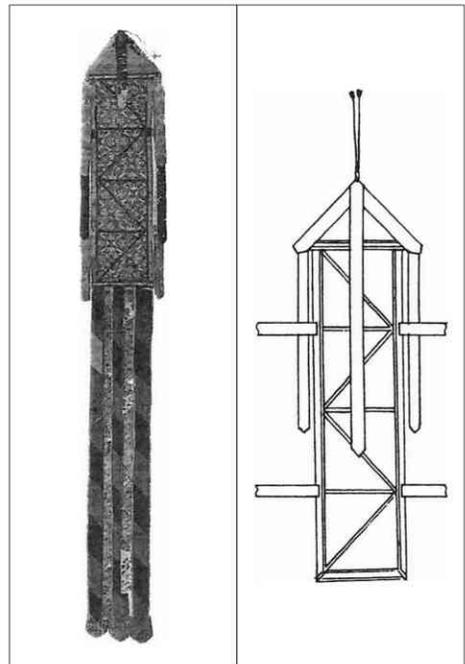


図16 錦斜継分袷幡 天平勝宝九歳(757)

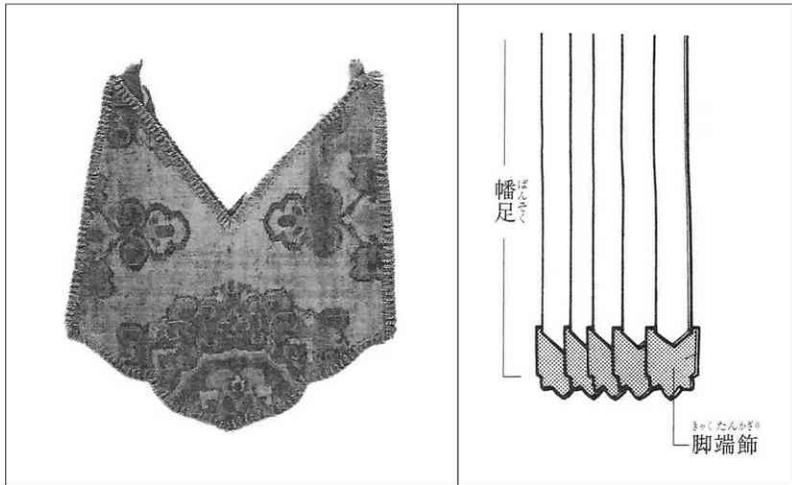


図17 幡脚端飾

るとのことであり、上端と下端とでは裂の種類を変えている点に工夫の跡が窺われる。こうした装飾的な使用は幡足にあっても発揮されている。幡足は五条を垂下し、各条とも正方形の裂をつなぎ連ねて縁を付ける。そのうえ、奇数条目と偶数条目の裂を交替している。すなわち、前者の条は二種の綾を繋ぎ合わせて纈纈・蔦纈平絹を連ねて平絹の縁を付ける。なお、各々の幡足下方には縁かがりのある手の込んだ主記の脚端飾を飾っている。

幡脚端飾は道場幡の垂脚の下端の部分である(図17)。脚端飾は垂脚の下橋を錦の花形の止め飾で両面から抑えられている。前述のべたように聖武天皇一周忌齋会に斎場東大寺境内に懸け並べた。脚端飾の付いた道場幡は幡の全長は約3m、そのうちの半分を越える約175cmは垂脚で、その幡は各役10cmと細長い。もともと脆弱な織物製であるうえに細長い。垂脚は構造上ちぎれやすい。脚端飾の織り方は綾組織緯飾模様の唐花文条が主流を占めている。染めは纈纈・蔦纈で染められている。このように工夫を凝らした幡足の仕様には豊かな装飾性が感じられるのは、天皇の齋会という国家儀式に於ける特殊な状況下で使用されたという特異性である。

平安時代になると、遺品は皆無に等しいが、長楽寺の平絹幡(図18)と、二次的資料ではあるが『平家納経』法師品見返し絵に描かれた幡などがみられる。これらの幡頭は一周忌齋会用幡とほとんど変わりはなく、幡身のほぼ正方形の坪形といい、縁を付けた幡足はまさに同工な仕様である。こうした幡頭や坪の形・幡足の仕立ては鎌倉時代に於いても兵主大社の刺繍三昧耶幡に踏襲されている(図19)。

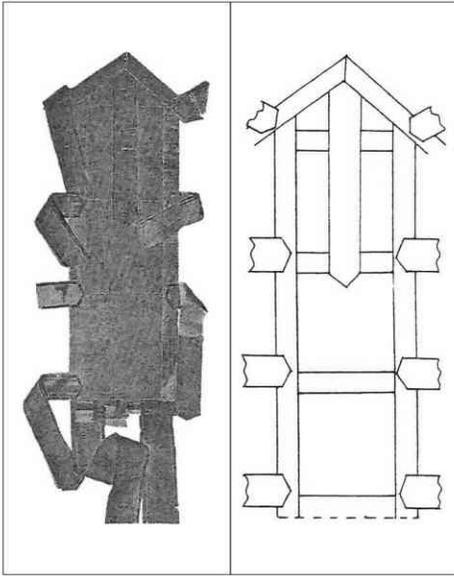


図18 平絹幡（長楽寺）12世紀後半

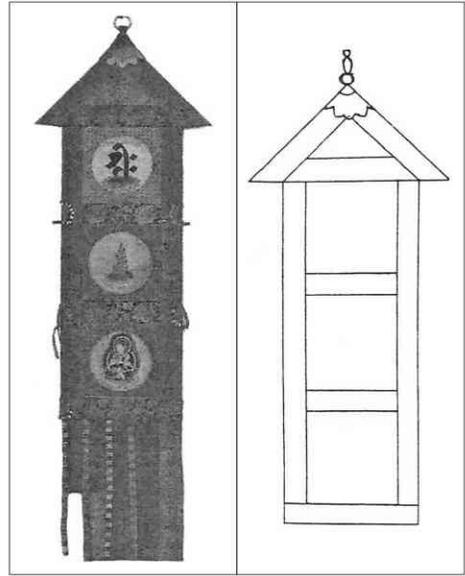


図19 刺繍三昧耶幡（兵主大社）14世紀前半

2-5 高貴寺の由来と歴史

高貴寺は葛城山西麓大阪府河南町平石の山中に位置する奈良前期の創建になる。今から千三百年有余前になる古刹である。寺伝によると、役小角（行者）によって創建された香花寺が始まりで、後に文武天皇683年～707年（天武12～慶雲4）在位697年～707年の勅願寺となり、平安時代には弘法大師空海（774-835）によって中興され、寺の名称も高貴寺と改称された。やがて江戸時代には慈雲尊者1718年～1805年（尊者）よって、律寺として以後繁栄することになる。やがて明治の廃仏毀釈を経て、現代高野山真言宗に属す。境内を入ると奥ノ院の参道の入口に後鳥羽上皇（1180～1239）の供養塔、奥の院御影堂の背後に後桃園の天皇の実母の開明門院（1717～1789）が御髮塔に埋葬されている。

2-6 高貴寺の堂内^{しょうこんぐ}荘厳具の幡

高貴寺の内陣の本尊は五大明王で堂内諸仏の配置図は中央に大日如来の教令輪身である不動明王を安置し、四方に降三世明王像（東）、軍荼利明王像（南）、大威徳明王像（西）、金剛夜叉明王像（北）、の四明王を配したものである。わが国で最初の五大明王像である。（図20）



図20 高貴寺

明王とは、一切の人びとを教化して救済せよ、という如来の命令(教令)を受けて、明(真言陀羅尼)を奉じ、異形の姿で人々を威嚇し、魔障を調伏する。力づくで仏の教えへと導くことを使命とし、密教において成立し発展したほとけである。

仏教はもとより三宝、つまり仏・法・僧によって成り立っている。今は「仏」は仏像・仏画、「法」は經典によっている。幡や蓋はこの「仏と法」の存在を象徴し、これでもってこれらを供養することを意味する。「幡と蓋」は「仏と法」との供養と莊嚴に欠くことのできないものである。「僧」は仏教を信奉することによって国の発展と繁栄とが得られると説かれている。仏教にとって幡の役割は欠くことの出来ない莊

嚴具として意義深い結果が得られた。

2-6-1 高貴寺の幢幡筥に 保管された幡

高貴寺の幡は経年の間、仏殿に懸けられていた古い幡を調査する。これらの幡は高貴寺の幢幡筥に什具として保管されていた幡である。(図21) 幢幡筥裏の墨書によれば、明治10年吉日に新しい幡が施主3名によって寄附され新しい幡は懸けられた。その後、古くなった幡を幢幡筥に仕舞われた。

それらの幡について、幡の形状や幡の断片、また、裂の欠損や刺繍糸のほつれや汚れの付着などについて調べた。(図22)

筥に納められている幡は、尊師や高僧達の延命・長寿を願う続命幡や、聖霊の菩提を祈る供養幡があり、仏前の周りを飾る莊嚴具として懸けられていた。



図21 幢幡筥の什具



図22 幢幡筥の幡

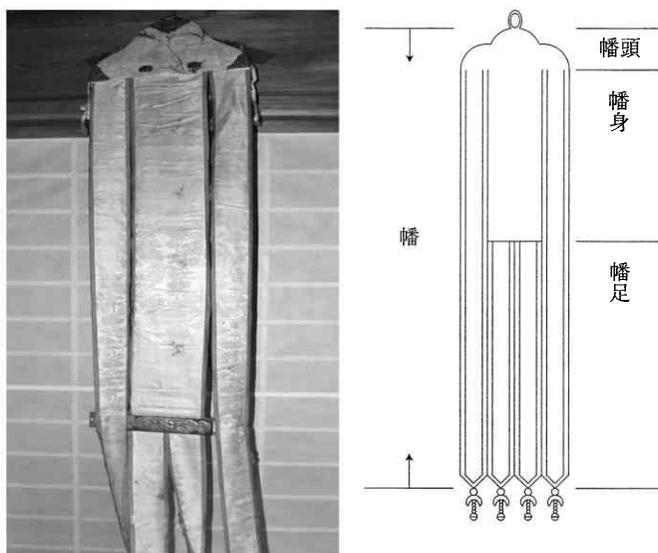


図23 唐幡



図24 幡頭部の金銅製の金具



図25 金銅板の水車紋と唐草

唐幡の形状は幡頭、坪は長い一坪のままの幡身を持ち、その下に4条で長い帯状の幡足垂れ下がっている。和幡の幡足は5条か7条の奇数であるが唐幡は偶数になっている。(図23)

この唐幡は幡頭と幡身の継ぎ目に糸の解がみられる。

幡頭部は円形で中央と角の2箇所にデザインされた金銅製の金具が嵌められ、幡頭には手書きの草模様が描かれ2個の金具がみごとに模様として表現としている。(図24) 幡身と幡足の間の坪界には金銅板があり、水車紋に唐草をあしらった線彫りがなされている。(図25) 車紋の由来は、源氏車の車輪を形象化したものが主で、ほかに水車紋、風車紋がある。家紋として定着したのは鎌倉時代とされる。水車は高貴寺の寺紋である。唐草模様は奈良時代に伝わった異国風な趣きの模様とされている。

仕立ては裕で、材質は綾織で菊文様が織られている。菊は秋の花であるが吉祥文様として通年に用いられている。したがって、高貴寺の尊師や高僧達の延命を願う続命幡であったと伺えられる。

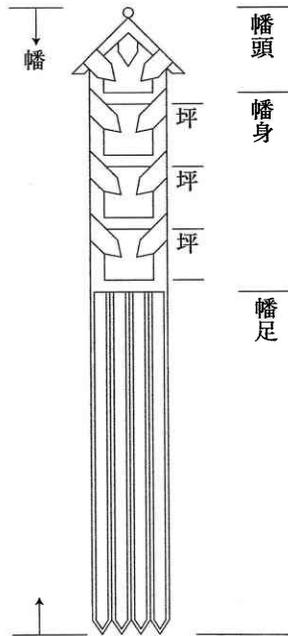


図26 命過幡

命過幡は尊師や歴代住職を供養するための命過幡であったようであるが、江戸時代（島原の乱の直後、1638年）の寺請け制度により、寺と檀家関係が浸透し、制度化されるようになり、檀家達が命過幡を仕立てて寺に納めるようになった。（図26）

この幡の形状は、幡頭部は三角形で中央にデザインした金銅製の金具が嵌められて、下方は舌となっている。下の頂より左右に帯紐状の幡頭手をつけられている。

幡身の各坪は縦長で坪界によって4坪ごとに区切られている。第2坪と第3坪には抱き菊の葉の紋が染められている。縁は一条で一条縁の中には縁の各坪界より紐状の幡手が重ね合わせ垂下げられている。幡足は長い带状で縁がつけられている。

また、幡身と幡足の間の坪界に花の形をデザインした3つの金具が嵌めこまれている。（図27） 幡の裏側の裂の剥がれた1部に和紙一面に書かれた梵字は幡の芯、あるいは供養のためではなかろうかと推察する（図28）。

また、慈雲筆の梵学律梁一千巻を所蔵している。堂内では梵字の手習いが行われていたのでは無いかと伺えられる。

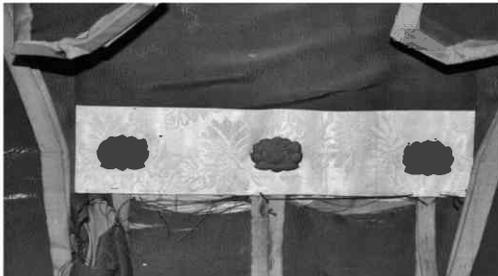


図27 花のデザインの金具



図28 梵字

仕立ては袷で、幡頭、幡身、幡足の裂は縮織りで茶色味を帯びている。幡身、幡足の間の坪堺は綾織で菊文様を使用している。縁は一条で赤みをおびた平絹を使用している。

菊の紋の由来については観賞用の菊は奈良時代に中国大陸より伝えられた。高潔な美しさが君子に似ているとされ、梅、竹、蘭と共に四君子とされた。文学上では「古今和歌集」、「源氏物語」などから登場する。平安時代には、陰暦9月を菊月と呼び、九月九日を「重陽の節句」「菊の節句」として、菊花酒を飲む「菊花の宴」「菊の杯」で邪気を払い、長命を祈った。菊文様も吉祥文様として、好んで装束に用いられた。鎌倉時代には後鳥羽上皇がことのほか菊を好み、自ら印として愛用した。その後、後深草天皇・亀山天皇、後宇多天皇が自らの印として継承し、慣例のうちに菊花紋、ことに十六八重表菊が皇室の紋として定着した（「十六弁菊は南朝の紋で、三十二弁菊は（十六弁八重菊）は、北朝（および現皇室）の紋である」ともいわれている）。天

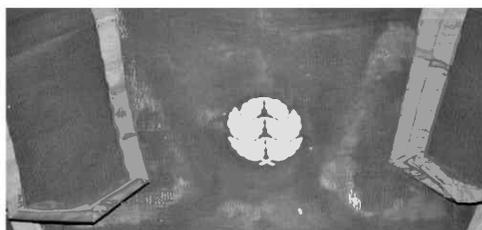


図29 抱き菊の葉の紋

皇より菊紋を下賜りしたものを直接使用するのは恐れ多いと考え、抱き菊の葉の意匠を図案化させたとされている。（図29）



図30 命過幡



図31 命過幡の裏



図32 幡頭部の三角形

命過幡は死者の冥福を祈るというための幡で江戸時代には、若死にした子女の衣装（小袖）などを幡に仕立てて寺に収めて供養したもののようなものである。幡の形状については、幡頭部の三角形はかなりの痛みが激しく裂が剥がれている。（図30）（図31）（図32）中央の帯紐は上方が

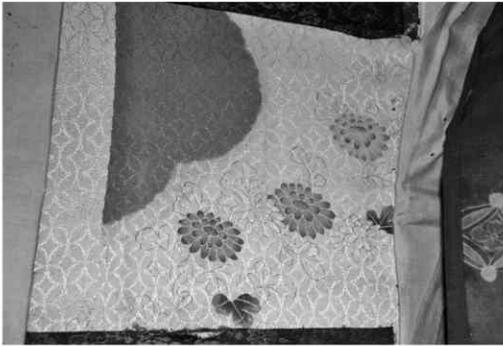


図33 七宝文様・桶けしほり染



図34 緞子袱紗地で菊唐草模様



図35 幡足の小袖意匠

吊緒になり、下方は舌となっている。下の頂より左右に帯紐状の幡頭手は欠失している。幡身の第3坪の裂は剥がれてうす紅色の平絹の裏が出ている。坪は縦長で3つの坪はかろうじて裂は保持している。坪堺によって各坪ごとに区切られている。縁は一条で一条縁の中には縁の各坪境より紐状の幡手が重ね合わせ垂下げられているがかなり痛みが激しい。幡足は長い帯状で縁がつけられている。仕立ては裕で一越（りんず）地に七宝文様が織り出され、菊文様には描き絵・刺繍で友禅染めに紅の桶けしほり染の小袖と推察される。(図33)

七宝文様とは仏語で言う七つの宝は「金・銀・瑠璃・しゃこ・琥珀・珊瑚」ですべてが大階渡来の貴重で珍しいものでした。これをちりばめたかのような美しい文様であることがこの名の由来になったとも言われます。

桶け絞り染は一見、室町中期～江戸時代初期にかけて流行した辻が花染に似ていますが、よく観察すれば、針の目のあとが見当たらない。その後、台頭した桶絞り染であることが解明しました。

坪堺の裂は緞子袱紗地で菊唐草模様で江戸時代の唐草には、菊も意匠

化されている。(図34) また、幡足は小袖裂を用い、幡足の縁にはうすい紅色の平絹で仕立てている。幡足の小袖意匠の構成のみごとなさは日本人の美意識の高さの表れであろう。(図35)

桶絞りとは、染め分け技法の方法には、桶絞りりと帽子絞りりがある。布の比較的大きな部分を、絞り防染により染め分けることを総称して、“染め分け”と呼ぶ。帽子絞りりなどではできない大きな染め分けには、桶を使用した桶絞りりの技法を用いる。両方底のない桶の中に染めない部分を入れ、染める部分は外に出して、きっちりと上下のふたをする。染料が入らないようにロープをかけて桶ごと染液の中に浸す方法で、一度に2～3反を染めることができる。手間と力と技術がいる作業で、職人芸となる。桶絞り染は貴品のある豪華なものであった。したがって、江戸中期ごろの豪族の子女の小袖は衣装であったと推察出来る。

続命幡で長命を願う幡として作られた。(図36) 幡の形状は幡頭は三角形で中央にデザインした金銅製の金具が嵌められ、下方は舌になっている。かなりの痛みがみられる。幡頭と幡身のつなぎ目にはほつれがみられ、幡身には幡手の欠損があり、坪にも綻びが生じている。各坪は従長で坪堺によって四坪に区切られている。

第2坪に太輪に本文字紋と第4坪に亀柄の裂がはめられている。文字紋の多くは苗字にちなんだものである。(図37) また、幡身と幡足の間の坪堺には十六菊の意匠である3つの金具が嵌め込まれている。(図36) 十六菊の意匠は江戸時代の幕府により葵紋とは対照的に使用は自由とされ、一般庶民にも浸透し、菊の紋の図案を用いた仏具などの飾り金具や和菓子が作られるなど各地に広まった。幡にも飾り金具として用いられたのであろう。



図37 本文字



図36 続命幡（菊の紋の飾り金具）



図36 続命幡



図38 金銅製の鈴



図39 続命幡の裏



図40 吉祥文様（鶴亀松の文様）

縁は一条で一条縁の中には縁の各坪堺より紐状の幡手を付けられているが欠損がみられる。幡足においては、かなりの痛みが生じているが、幡足下の端は金銅の脚端飾が付けられており、先にはデザインした金銅製の鈴が飾られ装飾的になっている。(図38)

幡の裏に書かれている墨書によれば、高貴寺の住職の慈雲尊者の修行の所であった高井田寺の長榮寺（長榮律寺）の信者たちが延命を願うための続命幡として寄進された。(図39) 仕立ては裕で描き絵の友禅染に鶴、亀、松、竹、波の文様がかかされている。「鶴は千年、亀は万年」といわれ、長寿なことから吉祥文様として松文様常緑樹で緑が変わらないことや樹齢の長さから吉祥の木として、竹はしなやかで強く風情の美しいことから吉祥文様として使われたり、波は変化する波の形を文様化したものなど、四季の変化に富んだ日本には、さまざまな生き物が身近に存在し、動植物、自然文様を見事に美化し吉祥文様とし表現している。(図40)



図41 命過幡 2対

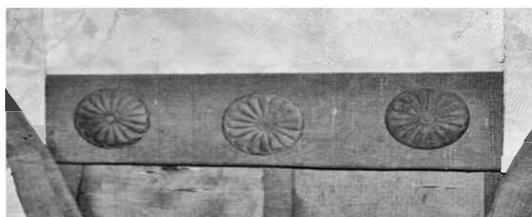


図42 十六菊の紋の飾り金具

命過幡 2 対の幡の形状は番頭は三角形で下方は舌になっている。(図41) 左右に帯紐状の幡手をつけられている。1 対の幡手が1つ欠落している。幡頭、幡身の状態はほとんど問題がないが幡足は少し痛んでいるようにみられる。

幡身と幡足の間の坪堺に十六菊の意匠である 3 つの飾り金具が嵌めこまれている。(図42)

裕仕立てで裂は幡頭と幡身は平絹の無地で、舌、幡手、幡足は縹色（紺色）で描き絵の友禅染である。1 条縁はこい縹色（紺色）である。

きもの柄は宝尽し文である。宝尽し文は吉祥文様の一つで、中国で雑宝とよばれる珠、銭、磬（けい）、祥雲、方勝、犀角杯（さいかくのはい）、書、画、紅葉、艾葉（がいやく）、蕉葉（しょうよう）、鼎（てい）、靈芝（れいし）、元宝、錠などを散らした文様である。この宝尽し文は中国の様子が日本風にアレンジされたもの。(図43) 構成要素は金袋・金囊（きんのう）宝珠・巾着・如意宝珠（にょいほうじゅ）、隠れ蓑（かくれみの）、宝巻（ほうかん）・巻軸、丁子（ちょうじ）、打ち出の小槌（うちでのこづち）、分銅、宝鑰（ほうやく）など多様で揃わなくても宝尽し文と呼ぶ。本来ならば、幡の文様には仏事用として、たとえば



図43 宝尽し文の吉祥文様

たとえば羯磨・蓮華・種子などを主題としていたが、仏教的でない文様たとえば吉祥文様などめでたい文様を自由に使われていたことが意味深いように思う。



図44 命過幡



図44 命過幡 (裏側)

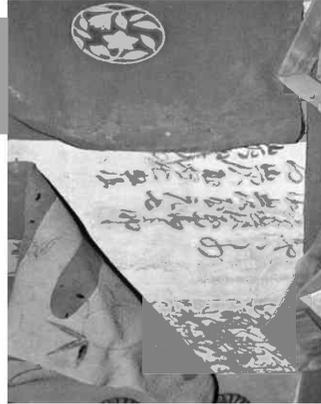


図44 命過幡



図45 幡足3本

この幡は命過幡で死者の冥福を祈るために追善供養として作られた。(図44) 幡の形状は幡頭部は三角形で中央にデザインした金銅製の金具が嵌められ、下方は舌となっているが幡頭手の1つは欠損している。また、幡頭縁の左右の角にもデザインした金銅製の金具と十六菊の飾り金具がつけられている。各坪は縦長で坪堺によって4坪に区切られていたが、第3坪、第4坪に裂の剥がれみられる。第3坪に桔梗の枝丸紋と第4坪には花唐草文様の友禅染の裂が嵌められた部分から和紙の手習済のものが裏打ちとして用いられたと思われるものがみえている。坪の周りに縁の各坪堺より幡手がつけられているが幡手には裂の痛みがあり、欠損もみられる。幡足は1本を除いて3本は欠失している。しかし、幡足3本は剥がれて保管されている。(図45) 桔梗の枝丸紋は「枝丸」紋を華麗に作るあまり、造形を離れて、写真的な紋が多い。花唐草は蔓草の蔓が絡んで曲線を描く文様に花をあしらったもの。奈良時代に伝わる異国風な趣の文様。袷仕立ては袷で、縹色一越地で花唐草文様の手描き友禅染である。

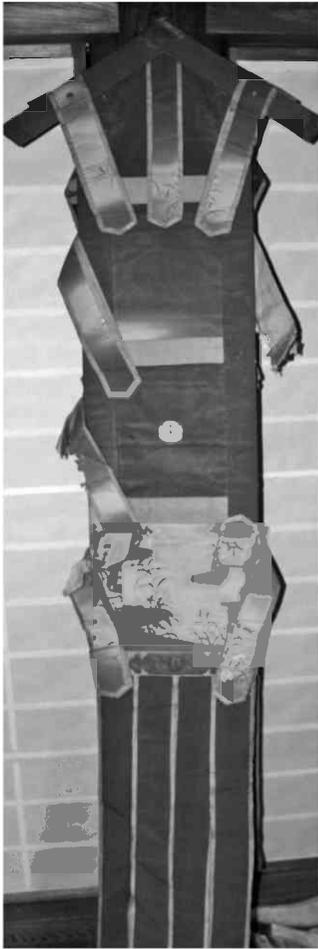


図46 命過幡



図47 命過幡（裏側）



図48 三坪の撫子柄の友禅染



図49 金銅製の鈴

この幡は統命幡で長命を願うために作られた。(図46)
幡頭部は三角形で中央にデザインした金銅製の金具が嵌められ、下方は舌となっている。また幡頭縁の左右の角にはデザインした金銅製の金具がつけられている。各坪は縦長で坪界によって4坪に区切られている。第二坪に抱き合わせ菊の葉の紋と第三坪には友禅染の裂が嵌められている。坪の周りに縁の各坪界より幡手がつけられているが幡手の裂の痛みが激しく、欠損もみられる。仕立ては袷で、縹色一越地に手書き友禅染の撫子文様が染められている。それらの撫子文様に金、桃色うす桃色などの刺繍がほどこされている。この着物は一ツ紋の留袖のようである。縁は赤みを帯びた平

絹を使用している。撫子文様は秋の七草（撫子・桔梗・萩・女郎花・すすき・藤袴・葛）の代表文様とされている。幡の裏側に墨書があり、明治九年に施主によって釋得道、釋尼得法、釋尼照行達の尊者、尼、信者の供養ために寄進された。(図47) 釋・釋尼は浄土真宗の戒名で、浄土真宗のみ使われている。釋というのは、お釈迦様の釋を頂いており、お釈迦様の弟子になるという意味らしい。

幡足においては、かなりの痛みが生じているが、幡足下の端は金銅の脚端飾が付けられており、先にはデザインした金銅製の鈴が飾られ装飾的になっている。第三坪や幡足には撫子文様の友禅染で染められている。(図48) (図49)

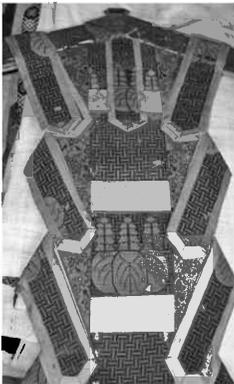


図50 小型の続命幡



図51 小型の続命幡の裏側



図52 幡頭の裏側

小型の続命幡は大型幡の約半分ぐらいの大きさである。(図50) 幡の形状については、幡頭部は三角形で、中央にデザインした金銅製の金具が付けられ下方は舌となっている。幡頭部の頂より左右に帯紐状の幡頭手がつけられている。幡身の各坪は縦長で坪境によって3坪に区切られている。縁は一条で一条縁の中には縁の各坪境より紐状の幡手が重ね合わせて垂れ下がっている。幡足は欠失した部分もあるが一部の垂脚の下端の部分に脚端飾が残っている。(図51) 袷仕立て表の材質は綿織りで桐の紋が織り出されている。(図52) 第二坪には桐の紋がデザインされている。五三の桐は天皇の紋とされている。天皇は桐竹鳳凰文を用い、菊の時と同じように貴族たちが桐の使用を遠慮したため、桐は菊とともに皇室の紋となった。桐は中国で鳳凰が住むとして尊重された木。日本の格調高い代表的な吉祥文様のひとつである。



図24 幡頭部の金銅製の金具



図25 金銅板の水車紋と唐草り



図30 命過幡



図35 幡足の小袖意匠

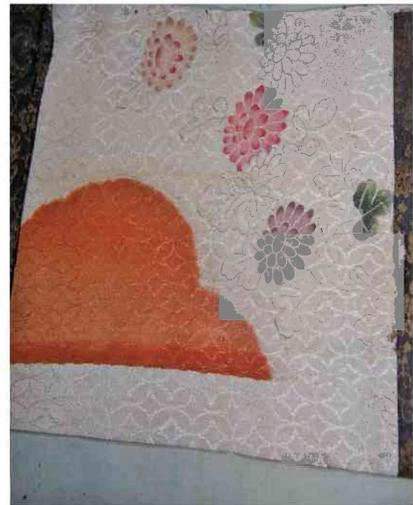


図33 七宝文様の桶けしほり染

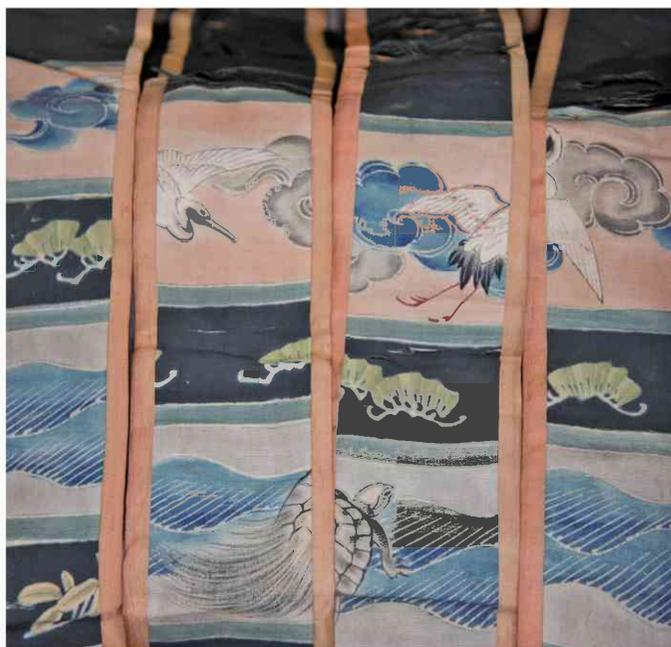


図40 吉祥文様 (鶴亀松の文様)



図44 命過幡



図43 宝尽し文の吉祥文様



図49 金銅製の鈴

3. まとめ

幡というものは、古代インドでは「パターカー」と称され、覚りを開いた者や勝者のしるしとされたもので、転じてこれが降魔のしるしともなったという。やがて「幡」を作ることによって功德が得られ、また寿命の延長までも得られるといい、現世の利益が説かれたのがはじまりである。日本への幡の伝来は日本古来の勅撰書である日本書紀によると、百済の聖明王より幡蓋がもたらされたのが最初とされている。幡蓋は幡（梵語の ^{パターカー}pataka）と蓋（cha-tra）の二具を指すが、密教では四角形の天蓋の四隅に幡を垂らす三昧耶天蓋がありこれは幡（はた）と蓋（かさ）を組み合わせた幡蓋と言う荘厳具である。わが国の古典では「幡蓋」を熟語で使用する人が多いが、天蓋と具である。わが国の古典では「幡蓋」を熟語で使用する人が多いが、天蓋と同意語で使用する可能性がある。天蓋には阿闍梨を覆う人天蓋と諸尊を覆う仏天蓋と区別されている。天蓋には玉飾りをつけたり、美しい裂（綾や錦）を用いたり、蓮華を象ったりしたところから宝蓋・華蓋ともよばれた。仏典では宝蓋や光明が仏を荘厳する天蓋に化したことを説いている。幡には長命を願う続命幡、死者の冥福を祈る命過幡など追善供養として作られた。幡の形制は舌をそろえた三角形の幡頭とふつう数坪に区切られた長方形の幡身を持ち、側面には幡手、下端に幡足をつけるのが基本であり、あたかも人形（ひとがた）を凝して作られたかのようにもみえる。和幡の幡足はおおむね五条か七条の奇数になるものが大部分であるが、唐幡は偶数となっている。日本の文化は奇数文化の志向となっており、幡足においても同一傾向が見られる。

材質は金襴・錦・綾・平絹などの裂地製や友禅染に刺繍のものが大部分であったが、地に金銅版に透彫・線彫を施した金銅幡などがある。金襴は古くペルシア等で行われたものが中国で発達し室町時代に日本に渡来、桃山時代より江戸時代を経て現在に至るまで、京都西陣を主産地として織りだされている。明治より大正にかけての本金による金襴の優品が多く残っている。よって、堂内の幡は圧倒的に多く金襴で仕立てられていることが伺える。一方、友禅染は江戸時代中期の初め、扇絵師、宮崎友禅が完成させたものという。それまでの模様染技法を応用して、自由な模様表現と豊かな色彩を使って新しい模様染技法を確立した。友禅染の特色は糊防染にあると考えられている。友禅染は今日もなお和服美の中心的な位置をしめている。また刺繍はともすれば友禅染などの美しさをよりきわだっている為に、補助的に加飾する技術と考えられることが多い。しかし、きわめて写生的な視覚や技術が生まれ新鮮な感動を与える。幡の文様には仏事用として、たとえば羯磨・蓮華・種子などを主題としていたのが本来であるが、仏教的でない文様たとえば吉祥文様などめでたい文様を自由に使われていたことが意味深いように思う

命過幡については七世紀後半の幡が「戊子年七月十五日」銘のある命過幡、正倉院宝物のなかにも法隆寺の幡九首ばかり命過幡が混入しているように、導師や高僧達の供養するための命過幡であったようであるが、江戸時代（島原の乱の直後、1638年）の寺請け制度により、寺と檀家関係が浸透し、制度化されるようになり、檀家達や若死にした子女の衣装（小袖）など幡に仕立てて寺に納めて供養した。現在においても伝承されている。

仏教はもとより三宝、つまり仏・法・僧によって成り立っている。今は「仏」は仏像・仏画、「法」は經典によっている。幡や蓋はこの「仏と法」の存在を象徴し、これでもってこれらを供養することを意味する。「幡と蓋」は「仏と法」との供養と莊嚴に欠くことのできないものである。「僧」は仏教を信奉することによって国の発展と繁栄とが得られると説かれている。仏教にとって幡の役割は欠くことの出来ない莊嚴具として意義深い結果が得られた。

謝辞

本研究を行うに当たり、貴重な資料を御提供くださりました高貴寺住職前田弘隆氏、種々の御助言をたまわりました船宿寺の住職菅原正光氏に謹んで御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 伊藤幸作：日本の紋章、ダヴィッド社、(1965)。
- 2) 上野明雄：日本書紀②巻第11仁徳天皇～巻第22推古天皇、小学館、(1996)。
- 3) 上野明雄：日本書紀③巻第11仁徳天皇～巻第23舒明天皇、小学館、(1996)。
- 4) 大島建彦：日本の神仏の辞典、株式会社大修館書店、(2001)。
- 5) 沢田むつ代：日本の美術4（題263号）染織（原始・古代）、至文堂、(1988)。
- 6) 鈴木敬三：有機故実大辞典、KK 古川博文館、(1996)。
- 7) 青海邦子：船宿寺における花供養法要と紫橙護摩供養の僧服について、大手前女子短期大学大手前栄養文化学院、大手前ビジネス学院、研究録、(1990)。
- 8) 青海邦子：堂内の莊嚴具としての幡の一考察（その一）、大手前女子短期大学「研究集録」第26号、(2007)。
- 9) 田中義恭・星山晋也：目でみる仏像辞典 株式会社東京美術 (2000)。
- 10) 千鹿野茂：都道府県別姓氏家紋大辞典 西日本編、柏書房株式会社、(2004)。
- 11) 中村元：図説佛教語大辞典、東京書籍株式、(1988)。
- 12) 長沼静：染色標本集 下、日本和装教育教会、(1985)。
- 13) 林英男：日本仏教史辞典、株式会社古川弘文館、(1999)。
- 14) 松本包夫：日本の美術10 (293) 正倉院の錦、(1990)。
- 15) 光森正士：正倉院宝物にみる仏具・儀式具、紫紅舎、(1993)。
- 16) 大谷女子大学文学部文化財学科：神下山高貴寺一文化財調査報告書一、(2005)。

- 17) 泡坂妻夫：家紋の話―上絵師が語る紋章の美―、新潮社、(1997)。
- 18) 村上道太郎：着物・染と織の文化、新潮選書、(1986)。
- 19) 沖津文幸：絞り染め技法、理工学社、(1984)。

資料

注1) 『日本書紀』注釈書（著者による現代語訳）

冬10月に百済の聖明王は（またの名は聖王）西部姫氏達率怒喇斯致契らを派遣して、釋迦仏の金銅像一軀・幡蓋若干・経論若干を献上した。

注2) 31年秋7月新羅は、大使奈末智洗爾を派遣し、任那は達率奈末智を派遣して、ともに来朝した。そうして仏像一具と金塔、それに舍利と大観頂幡一具・小幡12条を合わせて貢上した。そこで仏像は葛野の秦寺に安置し、ほかの舍利・金塔・大観頂幡などはみな四天王寺に納めた。

注3) 壬戌（9日）に、出雲国司に詔して、嵐に遭遇した蕃国の人を上京させた。この日に越の蝦夷の僧道信に、仏像一軀、灌頂幡・鐘・鉢各一口など献上された。

注4) 徳光禪師 奈良県南葛城郡史

注5) 具足戒 サンスクリットの〈ウパンサンパダー〉upasampada の漢訳。仏教の出家教団（僧伽）に入るときの試験をいう。原則としてだれでも僧（比丘（びく））になることが許されるが、しかしつぎの場所に限って入団許可は得られない。たとえば20才に満たない者、父母の許しを得ない者、負債のある者等、20種ほどの場合がある。

注6) 薬師瑠璃光如来 東方に創造される極楽世界である浄瑠璃世界の教主である仏。万病を治癒し人の寿命を延ばすことを本願とする仏として信仰されている。

注7) 巖船明神 その土地の守神でおそらく自然崇拜の中での山の神として起こって来た。

注8) 観世音菩薩 梵語アヴォロキテシュヴァラ Avalokitesvara の漢訳。世に光を与える名（音）の持主を意味する光世音、なやめる衆生（世）をみそなわす人を意味する観世音、いずれも菩薩の慈悲を代表する名である

注9) 不動明王とは明王中で最も中心となる尊各で、不動尊、無動尊と呼ばれる。降三世明王とは三つの世界を降伏するものの意味で、インドのシヴァ神に起源する尊格といわれる。軍荼利明王とはどくろをまくものという意味がある。蛇と関係の深い尊であることは、軍荼利の体のあちこちに蛇が巻きついて表わされていることから判る。大威徳明王とは死の神ヤマを倒すもので、ヒンドゥー教の死者の王を取り込んで、さらにそれより強力な尊格として作りだされた。金剛夜叉明王とは五大明王中でこの尊のみ名称の頭に「金剛」がつくので、金剛界系の忿怒尊、中でも金剛牙菩薩との関係が深いとされている。